

二〇三三年一月二三日

焼栗の爆ぜて振り向く初大師

なつき

小気味よき音たてて摘む青菜かな

愛正

絨毯に靴音しづむ夜のホテル

ひのと

二〇三三年一月二日

初稽古待てる幼なの正座かな

ひのと

一人鍋つつきて味の薄きこと

たか子

冬帽を目深に市の刃物研ぎ

なつき

二〇三三年一月一日

酒蔵の白壁まぶし寒の晴

せいじ

湯気立てて帰郷の子らを迎えけり

かえる

畝大根もろ肌脱ぎに競り上がり

あひる

帳綴や祖父の代よりこの判子

ひのと

白息を残し言葉の消えにけり

うつき

二〇三三年一月一日

糊強き襟を立たすや初仕事

ひのと

物見して清水坂の寒鴉

うつき

二〇三三年一月九日

赤銅の太陽沈む霧の沖

みきお

大焚火一人となつてしまひけり

うつき

一抜けし人の噂や浜焚火

ひのと

ファスナーを喉まで上ぐる寒の入

せいじ

二〇三三年一月八日

遅しき冬芽の枝に御籤結ふ

はく子

七種の火をとめ塩をひとつまみ

みきえ

霊峰の芯となるべく滝凍る

ひのと

霜枯の野より翔ちたる羽音かな

むべ

寒に入る火種の如き船尾灯

ひのと

二〇三三年一月七日

新海苔を炙れば磯の香餅に巻く

かえる

息白く泥のボールを抱き帰る

ひのと

毎日句会みゆる選・二〇三三年一月一五日